

Story 37

# 教師の発言を30%削減する

国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター 総括研究官 藤平 敦

事例

A小学校に着任した新卒のE教諭は4年2組の担任。A小学校の教育目標は「自分の考えを持ち、他人の考えも尊重できる子どもの育成」であるため、E教諭は授業等に「話し合い活動」を積極的に取り入れることにした。

5月最終週の学級活動は各学級の裁量によるものであった。2組では、①E教諭の提案により、「お楽しみ会」をすることにした。そこで、E教諭は「お楽しみ会」の内容を決めるための話し合いの場を設定し、初任者指導担当のF教諭も同席することになった。

児童A (司会者) 「お楽しみ会で何をやりたいですか？」

児童B 「ドッジボール」

E教諭 「②(司会者に対して)理由を尋ねなくていいの？」

児童A (司会者) 「理由も言ってください」

児童C 「サッカー。理由はサッカーが好きだからです」

E教諭 「雨が降った場合のことも頭に入れてね」

児童D 「体育館で卓球大会。雨の心配がないから」

児童E 「私は運動が苦手なので、教室でできることにしてほしいな～」

↓

E教諭 「③クラスの絆をつくるために、大縄跳びなんてどうかな？」

児童A (司会者) 「それでは、大縄跳びはどうですか？」

児童全員 「……」

チャイムが鳴ったため、話し合いは翌日に延期されることになった。放課後、初任者指導担当のF先生がE教諭に「自分の発言を今の30%削減してみると、お楽しみ会の内容が決まると思うよ」とだけ助言をした。E教諭はその言葉の意味がわからなかったが、翌日は意識して発言をしないように努めた。

児童A (司会者) 「それではもう一度決めたいと思います。みなさんどうですか？」

児童F 「④チーム対抗戦にしたら面白いんじゃない？」

児童D 「それなら、卓球の対抗戦がいいな～」

児童A (司会者) 「でも、運動が苦手な人もいるよね」

児童G 「チーム対抗戦のクイズ大会はどう？」

児童E 「賛成！」 児童B 「僕も賛成！」

児童A (司会者) 「E先生、クイズ大会でいいですか？」

E教諭 「もちろん！」

E教諭はF先生の言葉の意味がやっと理解できた。

要点

## ① 子どもの思考力をはぐくむ

はじめから教師の提案(お楽しみ会)ではなく、子どもたち自身が提案することにも良いかもしれない。子どもが自由に提案できる機会を意図的につくることは、子どもの思考力をはぐくむことにつながる。

## ② 子ども自身が気がつくまで待つ

理由を尋ねる必要性を子ども自らが気がつくことは、子どもの判断力を高めることにもなる。教育には、待つことも時には必要である。

## ③ 教師の出番はどこかを見極める

教師の発言は子どもを誘導してしまうものであり、そのことが、子どもが自ら考えることにブレーキをかけてしまうことにもなる。子どもの自主性を引き出すためには、ヒントを与えるまでに留めておきたい。

## ④ 子どもの発想を大切にす

「チーム対抗戦」は子どもならではの発想である。子どもには、大人にはない発想力がある。教師は子どもの意見をまず肯定から入るように努めたい。

解説

本事例からは、教師主導から子ども主導にすることの大切さを改めて確認できる。意見が違うからこそ話し合う必然性が生まれるのであり、そこに教師が不必要に発言することは、子どもの思考力、判断力、表現力をはぐくむ機会を奪うことにもつながる。ただし、教師が発言を控えることは、子ども任せにするということではない。適宜、行事等の目的を確認するとともに、教師が子どもの考えや行動について、意味づけをしてあげることが、子どもの自信を深めるとともに、世界観を広げることにつながるのである。

資料

- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別活動編」第3章 第1節(平成20年8月)
- ・文部科学省「生徒指導提要」第2章 第4節(平成22年3月)



**PROFILE** ふじひら・あつし 20年間の公立高等学校教諭を経て、平成19年4月より現職。生徒指導の新たな指針となる「生徒指導提要」(文部科学省/平成22年3月)の作成準備段階から関わる。「学校で役に立つものを作るには学校現場へ足を運ぶ」をモットーに、全国の実践事例を積極的に収集・集約・分析をしている。